神学との出会い

マタイによる福音書 4 章 23 節-25 節

賈　晶淳

休暇で韓国にいる時に『福音と世界』の 2025 年 4 月号の原稿を頼まれました。内容は荒井献先生の『イエスとその時代』や神学が韓国のキリスト者にどう受け入れられているのかについてです。荒井献先生が 8 月 16 日に天に召されたことは日本に戻ってから知りました。

荒井献先生は百人町教会の無牧の時代に 2 度証詞をされ、1 度目は 1970 年 11 月 8 日で、その日は大久保祈祷礼拝が始まった翌週の礼拝でありました。そして、最近では 2015 年に証詞をして下さいました。先生は日本で最も優れた聖書学者(新約)で、青山学院大学では木田献一先生と同僚で、同年齢の友人でもあり、神学科廃止の時は東大教授として反対闘争を支援されたそうです。

荒井先生の著書『イエスとその時代』は 1974 年に岩波新書版で出されました。その翌年に民衆神学者の一人である徐南同先生によって韓国語に翻訳され、基督教書会から新書版で出版されましたが、韓国語版の書名は『イエスの行態』でありました。私がこの本と出会ったのは 1981 年、神学校 1 年の時で、新約科目の必読の本でありました。初の日本の神学との出会いでありました。全ての内容を理解したとは思いませんが、学問的に大きな影響を受けたのは確かで、幾つかの教会が集まった青年会集会で自分が発題したのを覚えています。当時の韓国情勢の中で聖書の理解や信仰においての渇きに答えてくれた書物であったと思います。そのような記憶もあり原稿を頼まれた時に迷わず直ぐ承諾をしました。

現在『イエスの行態』は絶版となり、2021 年に元ハンギョレ新聞記者の韓承東氏によって『イエスとその時代』(サーカス社)と本来のタイトルで翻訳されました。この本には序文として荒井先生が 2014 年に韓国を訪問した時、私の出身校の韓神大学で講演した文章が載せられています。

ここで今日の題と関連して個人的な話を少ししたいと思います。私は 1956 年ソウルで生まれ、大学卒業まで約 30 年間過ごしていました。1970 年代の後半は私の青年期でもありますが、軍事独裁のピークの時でもありました。町には戒厳令が敷かれ、軍人と戦車が走っている状況で、あらゆる緊急措置が出され、人々が身動きできない時期でもありました。

私の母教会の蚕室中央教会は 1975 年 12 月に創立され、その翌年の復活節に受洗したので厳しい時代に信仰の営みを重ねたことになります。この時が 20 代前半で、一労働者で過ごしていた私が新しい信仰と社会観と出会い、自分を大きく変えた時でもありました。それまで持っていた保守的な信仰と社会観を変え、教会青年会の議論や学生運動の主要メンバーたちとの出会いを通して見る目も開かれたのです。その過程の中で神学校に行くことを決め、軍を終えてから高検、大検をパスし、光州事件の翌年である 1981 年に唯一の希望校であり、私が属している韓国基督長老会の教団神学校である韓神大学の神学科に入学することができました。当時、教団も神学校も韓国で最もリベラルな信仰や神学で民主化運動の先鋒に立ち、その中で生まれた「民衆神学」をリードしていました。日本でも名が知られている同教団の牧師や神学者で安炳茂、文益煥、徐南同、朴炯圭のような先生たちがいました。彼らは民主化闘争の中で逮捕や拘禁や投獄を繰返していました。私たちは彼らを見ながら信仰や学問を学びました。安炳茂先生の『民衆神学を語る』(新教出版社)は青年時代の教会の仲間で日本留学中であった趙容來さんと桂川潤さんとの共訳で出版されたものです。以上が私の韓国における神学との出会いの話でありました。この時期に多くの信頼できる仲間に出会えたことも何よりのことと思います。

大卒後二つの教会で 7 年間務めた後、1992 年に神学の勉強を木田献一先生のもとで続けたく来日しました。きっかけは一九七九年から始まった蚕室中央教会と百人町教会との姉妹関係によるものでし

た。そのため出席教会と希望する先生に迷うことはありませんでした。そして、立教大学での修士課程を終えた翌年に百人町教会の牧師として招聘されました。韓国でもそうであったように日本でも生きた教会や神学と出会え、何より感謝したいことです。

韓国の民衆神学との関連では木田先生の著書にも幾つかの論文が載せられていますが、荒井献先生も『イエスとその時代』の韓国版の序文で先生自身と民衆神学との関連を述べています。日韓の神学者の神学的な共感と交流は私が知るずっと前からありました。因みに、私が木田先生に初めてお会いしたのが 1979 年 10 月 26 日。朴正熙が部下に殺され 18 年間の独裁が終わった日です。木田先生はソウルで開かれた「民衆神学」の国際フォーラムに日本の代表として参加するため来韓し、前から勧められていた百人町教会と蚕室中央教会との姉妹教会の関係をこの日から始めることにしたのです。

民衆神学のキーワードである「民衆」(オクロス)の概念を聖書から最初に持ち出したのは田川建三先生です。このことは徐南同先生の著書『民衆神学の探求』(新教出版社)を読んで知りましたが、その事実関係は 10 数年前に荒井献先生に直接確認することができました。民衆神学の大事な概念が日本の学者によって持ち出され、その概念をもとに韓国の神学者たちが神学を形成する共助関係を確認した時はとても嬉しかったです。

最後に本日選んだ聖書を民衆神学の視点で読んでみたいと思います。今日の本文はイエスが活動を始めて間もない時期のことが書かれています。23 節です。

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。

この箇所でイエスの主な活動が何だったのかが分かります。教えること、福音を宣べ伝えること、病気を癒すことです。活動の現場となったガリラヤはエルサレムから遠い辺境地で、平らな土地と湖がある関係で農業と漁業が盛んな比較的に豊かな地域です。そのため常に搾取と略奪の対象地となっていました。当然、民衆とはそのように搾取や抑圧の対象となる人々を指します。また、23 節と 24 節のあらゆる病に苦しんでいた人々は当時の最も疎外された層でイエスの関心の対象を表しています。それと同時に会堂での教えでは律法学者やファリサイ派の人々をも相手とし、福音はユダヤ人の枠を超えて語られていたことが分かります。この時にイエスと出会った人々はきっとその出会いを一生涯大事にし、福音を信じ、イエスの教えに従おうとしたと思います。

新共同訳聖書の訳者は 23 節で「民衆」、25 節で「群衆」という訳語を区別して使っていますが、ここでは民衆を指す「オクロス」が「群衆」と訳され、「群衆」の意味の「ラオス」は「民衆」と訳されています。この訳し方は「階層」を念頭に入れたものと考えられますが、「民衆」が「対象」ではなく「主体」を意味していると思うのが民衆神学の考え方です。イエスに出会った人が影響を受け、自らの生き方を変えようとしたこと、木田先生が語る「主体性の喚起」とはまさにこのことを意味していると思います。以上は私が出会った韓国と日本の神学を通しての聖書理解になります。

(2024 年 9 月 1 日証詞より)